

『五代史平話』の成立：「講史書」との関係

岡村，真寿美
九州大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/9646>

出版情報：中国文学論集. 27, pp. 48-63, 1998-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『五代史平話』の成立

——「講史書」との関係——

岡村 真寿美

一、『五代史平話』の構成

『五代史平話』は、梁、唐、晋、漢、周の各代それぞれ二巻ずつで構成されるが、現存する版本はそのうち梁史平話巻下並びに漢史平話巻下を欠く。現在台湾中央図書館に所蔵される版本は、宋刊とも元刊とも言われる。発見者の曹元忠は、「無異宋槧⁽¹⁾」⁽¹⁾と言い、阿部隆一は宋・建安刊とするが、宋諱を避けないなど肯首しがたい点もあり、その成立期の確定はさらに検討を要しよう⁽²⁾。

この『五代史平話』が、その大部分において歴史書の文章を用いることは、すでに多くの研究者が指摘するところである。その歴史書とは従来主に『資治通鑑』であろうとされてきたが、最近氏岡真士氏が論証されたように、むしろ『資治通鑑綱目』によると考えてよいであろう⁽³⁾。では、『五代史平話』は歴史書をどのように利用して成り立っているのだろうか⁽⁴⁾。

次の文章は、黄巢出生の場面である。

且説、曹州冤陶縣、有箇富人黄宗旦、家産數萬、販鹽爲生、喜聚集惡少。是那懿宗皇帝咸通元年上、黄宗旦妻懷胎、一十四箇月不産。一日、生下一物、似肉毬相似、中間却是一箇紫羅襖裹得一箇孩兒、忽見屋中霞光燦爛。宗旦向妻道、「此是不祥的物事。」將這肉毬使人携去僻靜無人田地拋棄了。歸來不到天明、這箇孩兒又在門外啼叫。宗旦向妻子道、「此物不祥、害之恐惹災禍。」遣伴當每送放曠野、名佐青草村、將這孩兒要頓放

鳥鳶巢内、便是擲下來、他怎生更活。過箇七箇日頭、黃宗旦因行從青草村過、但聽得鳥鳶巢裏孩兒叫道、「耶々、你存活咱每、他日厚報恩德。」宗旦使人上到巢裏、取將孩兒下來、抱歸家裏看養、因此命名佐黃巢。

(梁史平話 3 b)

この黄巢出生の顛末については、いづれに典拠を持つのか寡聞にして知らないが、『五代史平話』は口語を交えつつ自由な語り口で、その不思議に満ちた様子をこまかく描いているのが印象的である。なお、黄巢の出生については、後述の『残唐五代史演義伝』にも同じような話が見えるが、それが『五代史平話』の影響を受けたものであるかは不明で、或いは当時広く民間に広まっていた伝説に基づくのかも知れない。他方、明らかに歴史書を利用したと思われる箇所は次のようである。(傍線筆者、以下同じ)

僖宗皇帝乾符五年正月、李克用爲沙陀副兵馬使。有牙將康君立、李存璋等一處商議、「今天下大亂、朝廷號令不行於四方、此是英雄立功名、取富貴時節。今李國昌官高功大、天下聞名、他兒子勇冠三軍。若輔之以舉大事、則代北州郡、唾手可取。」恰遇代北饑荒、防禦使段文楚減克軍糧、軍士怨怒、將段文楚殺了、送符印、迎請李克用做留後。克用入府視事、表奏朝廷、求請救命、朝廷不肯允從。
(乾符五年春正月) 大同軍亂、殺防禦使段文楚、推李克用爲留後。
(唐史平話 2 a) 2 b)

振武節度使李國昌之子克用、爲沙陀副兵馬使、戍蔚州。時河南盜賊蜂起、沙陀馬使李盡忠、與牙將康君立、薛志勳、程懷信、李存璋等謀曰、「今天下大亂、朝廷號令不復行於四方、此乃英雄立功名、取富貴之秋也。李振武功大官高、名聞天下、其子勇冠諸軍。若輔以舉事、代北不足平也。」衆以爲然。會代北荐饑、漕運不繼、防禦使段文楚頗減軍士衣米、軍士怨怒、…(中略)…、於是盡忠夜執文楚繫獄、克用帥其衆趣雲州、行收兵衆且萬人。盡忠送符印、請克用爲留後、而殺文楚。克用遂入府視事、表求救命、朝廷不許。……

(『通鑑綱目』卷五十一)

『五代史平話』は、各代それぞれ概ね創業者の出世譚で書き出し、その後編年体でその国の滅亡までを述べるといふ構造になっている。そして、歴史書の利用は、梁史平話は全体的にそのような部分が少なく考慮が必要であるが、全体的に専ら後者の部分に於いて行われるといつて良い。

『五代史平話』の成立(岡村)

ところで、歴史書を利用する平話は、『五代史平話』の他にも幾つか有るが、特に歴史書への依拠度が高いものとしては、『宣和遺事』と『秦併六国平話』が挙げられよう。この二つの平話と『五代史平話』の歴史書を利用した部分とを比較するとき、『五代史平話』の場合、詩詞の挿入が極端に少ないことに気付く。『五代史平話』に於ける歴史書を利用した部分は、全体の七、八割にものぼろうかという分量であり、この部分に詩詞が少ないことは、結果として『五代史平話』には詩詞の挿入が少ない、という印象を与えている。次に『五代史平話』の詩詞挿入箇所を挙げる。(ここでは、作中人物の詠ずる詩詞も全て含めて表示する。また、同じ数字は同頁に複数の詩詞があることを示す。○印のあるものは開場詩または散場詩。なお、ここでは、「開場詩」とは、巻頭に置かれる詩、「散場詩」とは、巻末に置かれる詩をそれぞれ言うこととする。)

梁史平話卷上	1 a ○	1 b	2 a	2 a	2 b	3 b	4 a	4 b	5 a
	6 a	6 a	6 b	7 a	7 b	8 a	8 a	9 a	9 b
	11 a	11 b	12 a	12 b	13 a	15 a	17 a	20 a	20 a ○
唐史平話卷上	1 a ○	1 b	4 b	4 b	5 b ○	8 b ○	14 a ○	20 a ○	
唐史平話卷下	1 a ○	13 a ○	△	13 b ○	17 a ○				
晋史平話卷上	3 a	3 b	6 b ○	15 a ○					
晋史平話卷下	1 a ○	16 b ○							
漢史平話卷上	1 a ○	2 a	2 b	4 a	5 a	7 b			
周史平話卷上	1 a ○	2 b	4 b	13 b ○	22 a ○				
周史平話卷下	1 a ○	15 a ○	◎						

『五代史平話』が利用した歴史書全てを見たときと断言することはできないので、或いは遺漏があるかも知れないが、ここではその最大の典拠と目される『通鑑綱目』を利用したと考えられる部分について、その詩詞の挿入状況を調べることにした。尚、開場詩及び散場詩は、現『五代史平話』がその体裁を整えるときに付け加えられた可能性もあるので、今は論考の対照からはずすことにする。さて、その場合、表中の◎印を付した詩詞が歴史書を利用する

部分に挿入されたものである。先にも述べた如く、梁史平話には歴史書を利用した部分が少ないが、反面詩詞の挿入数を見ると、他巻に比べて格段にその数が多い。一方、唐史平話以下の各巻は、詩詞の挿入数そのものが少ないことがわかる。その上、これらの巻においては概ね七、八割が歴史書を利用して叙述を行っているにもかかわらず、そこに挿入される詩はわずか八首にすぎない。しかも、△印を付した詩は『綱目』にも引用されているので、『五代史平話』はおそらくそれを単に引き写しただけである。

つまり、『五代史平話』は、少なくともその歴史書を利用する部分に於いて、詩詞をその不可欠な構成要素とはしていないようである。では、なぜ『五代史平話』はこのような構成をとるのであるか。このことについて次段以下で少しく考察を加えたい。

二、宋代の「五代史語り」

そもそも「五代史」は、「三国志」と並んで宋代の庶民に愛された語り物の一種であったと考えられる。すなわち、宋・孟元老の『東京夢華録』に、次のような記事が見える。

崇、觀以來の、在京の瓦肆伎藝、…(中略)…、霍四究の「説三分」、尹常賣の「五代史」。

この記事からは、「説三分」や「五代史」が独立した一ジャンルとして数えられるほど流行していた様子がうかがえる。『東京夢華録』はさらに元宵節の夜にこの「尹常賣「五代史」」が演じられたことを記しており、「五代史」語りの人氣が当時いかに高かったかを示す資料となっている。

この「説三分」「五代史」のうち、「説三分」がおそらく三国故事を題材とする語り物であったことは、元代刊行の『全相平話三国志』とほぼ内容を等しくする刊本が『三分事略』と称することからも容易に推測できる。では、「五代史」とはどのようなものだったであろうか。入矢義高氏は『東京夢華録』のこの條について、「宋代の五代史語りは、いま元刊本『五代史平話』にほぼその原型を窺うことができよう。」¹¹⁾と云う。つまり、宋代の語り物の名残が、『五代史平話』にあるということであろう。元来平話は、語り物の種本の類であると考えられており、こ

『五代史平話』の成立(岡村)

れは極めて妥当な見解であると言える。

ところで、『五代史平話』は、先に述べたとおり、その大部分を歴史書に依つて成り立っているが、宋代には、このような歴史書を中心とした語り物があつたと言われている。淮園耐得翁の『都城紀勝』は「瓦舍衆伎」の中で当時の「説話」すなわち語り物の四つのジャンルをあげ、その一つである「講史書」（あるいは「講史」「演史」などともいう）について、次のように述べる。

講史書は、前代の書史文傳、興廢爭戰の事を講説す。⁽¹²⁾

また、呉自牧の『夢梁錄』卷二十「小説講經史」は、同じく「講史書」について『都城紀勝』よりももう少し詳しく、次のように述べる。

講史書は、『通鑑』、漢、唐歴代の書史文傳、興廢爭戰の事を講説するを謂ひ、戴書生、周進士、張小娘子、宋小娘子、邱機山、徐宣教有り。又た王六大夫有り、原御前供話に係り、幕士と爲る。請われてために講ずれば、諸史俱に通じ、咸淳年間に於いて、『復華篇』及び中興名将傳を敷演するに、聽く者紛紛たり、蓋し講得ずるの字眞に俗ならず、記問淵源甚だ廣きのみ。⁽¹³⁾

これらの記事を見るに、「講史書」とはその名の通り、『通鑑』その他の歴史書を講ずるものであつたことがわかる。⁽¹⁴⁾そしてこの記事の後、

但最も小説人を畏る、蓋し小説は、能く一朝一代の故事を講じ、頃刻の間に捏合すればなり。⁽¹⁵⁾

と続き、「小説」との差違を述べることから推して、「講史書」は原則として歴史書の内容を忠実に講じたのであろう。しかも、講釈師の名前に「書生」「進士」などの言葉が見えるところから考えれば、どちらかと言えば格調高い、あまり荒唐無稽に走りぬ語り物だつたに違いない。とするならば、大部分が『通鑑』（正確にはおそらく『通鑑綱目』）を利用して成り立っている『五代史平話』は、まさに宋代の「講史書」の姿をうつしたものだつたと考えることができそうである。

しかし、注意すべきは、前段で述べた如く『五代史平話』における挿入詩が極端に少ないことである。語り物が総じて散文と韻文とを組み合わせさせて演じる形式であつたことは、「説話」の大きな来源の一つと目される変文から

してそうであるように、古くからの特徴の一つであると認識されている。事実『五代史平話』でも、歴史書をあまり用いない梁史平話巻上においては多くの詩詞が挿入されていた。この詩詞の引用ということについて魯迅は、

詩を引いて証しとすることとは、…（中略）…、ただ、「昔の言葉借りて重みをつける」という精神であり、漢であろうと宋であろうと、学士であろうと市人であろうと、時期やその学問はみな極めてかけ離れていても、実は一致するところがあるのである。¹⁶⁾

と述べて、それが漢唐の昔から行われてきたことであると同時に、「説話」に欠くべからざるものであったとする。そしてその上で「講史書」が詩詞を挿入することを「風雅」の一種と解し、先に引いた『夢梁録』の文章を引用しながら、

吳自牧は講史の名手を「講得ずるの字真に俗ならず、記問淵源甚だ廣し」と記すが、これこそすなわち小説が詩詞を多用する理由ととらえることもできよう。¹⁷⁾

と述べている。つまり高尚な「講史書」であればこそ、これまた雅な詩詞の挿入が不可欠であったのであろう。

詩詞の挿入は、当時の講唱芸能全体にとって、語りの中のアクセント、或いはなじみのリズムを形成するためのいわば必須の要素だったにちがいない。しかも、詩とは、その引用が「證」となり得るほどに、まさに知識人の文学であるという意識が根強かったのであろう。となれば、「講史書」にとって詩詞の挿入はその教養レベルの高さを実証する重要な要素だったはずで、それを捨ててしまった『五代史平話』は誠に不思議というほかない。一方、そのような『五代史平話』の形態は、読み物として楽しむには何ら不都合はなかったと思われる。純粹に読むための作品であれば、詩詞はあっても無くても構わないのではないだろうか。特に講史小説に頻繁に見られる「有詩爲証」という形式の詩の挿入は、場合によっては、話の流れの勢いを止め、読者の興をそぐことにすらなりかねない。してみれば、『五代史平話』の構成は、そのような語り物としてのスタイルを前提としていないのではないか。つまり、『五代史平話』は、「語り物」の名残をとどめるといっても、より「読み物」としての役割を意識した構成になっているのではないか。とするならば、少なくともこの作品の歴史書を利用した部分を宋代の「講史書」の名残と考えるのは難しそうである。

三、『残唐五代史演義伝』と『南宋志伝』

明代に成立した通俗小説で『五代史平話』と同じ時代を扱った作品に、『残唐五代史演義伝』（以下『残唐』と略称する）がある。この作品が基本的に後唐の武將李存孝を中心とする物語であり、彼の死後尻窄みの感がある収束を迎える構成であることは、すでに多く指摘されるところである。⁽¹⁸⁾ この「尻窄み」部分は、その大部分が歴史書を利用して書かれている。次に『残唐』より例を挙げ、『綱目』『通鑑』と対照してみることにする。

時梁王聞彦章已死、乃聚宗族長幼、相向而哭、君臣商議、破敵之策、皆莫能對、遂謂宰相敬翔曰、「汝嘗言生子當如李亞子、教吾事唐、吾一時不從、以至于此。今事急矣、將若之何。」翔泣曰、「臣受先帝厚恩、殆將三世、名爲宰相、其實朱氏老奴耳。事陛下獻言、莫非盡忠、陛下不肯早圖、致有今日、縱使陳平更生、諸葛復出、誰能爲陛下計也。臣請先賜一死、不忍見宗廟喪亡。」因與梁主慟哭一場。

（卷七 四十三回「李嗣源據守大梁」）

（龍德三年冬十月）唐主救鄆州、梁師敗績、王彦章死之。唐主入大梁。梁主瑱自殺。唐遂滅梁。

……梁主聞彦章就擒、唐軍且至、聚族而哭、召羣臣問策、皆莫能對、謂敬翔曰、「朕忽卿言以至于此、今事急矣、將若之何。」翔泣曰、「臣受先帝厚恩、殆將三紀、名爲宰相、其實朱氏老奴。事陛下如郎君、前後獻言、莫匪盡忠、陛下不用、致有今日、雖使良、平更生、誰能爲陛下計者。臣願先賜死、不忍見宗廟之亡也。」因與梁主相向慟哭。

（『綱目』卷五十五）

王彦章敗卒有先至大梁、告梁主以「彦章就擒、唐軍長驅且至」者、梁主聚族哭曰、「運祚盡矣。」召羣臣問策、皆莫能對。梁主謂敬翔曰、「朕居常忽卿所言、以至于此。今事急矣、卿勿以爲慰。將若之何。」翔泣曰、「臣受先帝厚恩、殆將三紀、名爲宰相、其實朱氏老奴、事陛下如郎君。臣前後獻言、莫匪盡忠、陛下初用段凝、臣極言不可、小人朋比、致有今日。今唐兵且至、段凝限於水北、不能赴救。臣欲請陛下出避狄、陛下必不聽從、請陛下出奇合戰、陛下必不果決、雖使良、平更生、誰能爲陛下計者。臣願先賜死、不忍見宗廟之亡也。」因與

梁主相向慟哭。

(『通鑑』卷二七二 後唐莊宗光元年)

『通鑑』『綱目』を並べて見ればわかるように、『綱目』は『通鑑』をダイジェスト化しているが、その省略されたかたちの『綱目』をもって『残唐』と対照しても、『通鑑』に比べて不足することはない。また、第四十四回は、

唐主遂崩、年六十九歲、時長興四年也。史官評曰：

明宗美善頗多、過亦不至于甚、求諸漢・唐之間、蓋亦賢主也。觀其內無聲色、外無遊畋、不任宦官、廢內藏庫、四方貢物、悉歸之有司、褒賞廉吏、嚴治貪墨。雖四方未平、而中土綏靖、享屢豐之報。若輔佐得人、過舉當人少矣。其焚香祝天之言、發于誠心。天既厭亂、遂生聖人。用是觀之、武丁恭默思道、夢得傅説、周公納策金縢、武王疾瘳、天人交感之理、不可誣矣。

(第四十四回)

という「史評」が挿入されるが、これは胡致堂の『讀史管見』の文章で、『綱目』にも引用されるものである。これらの例を見てもわかるように、『残唐』後半が歴史書を利用して成り立ち、しかもその典拠は『綱目』に近いことがわかる。

さて、この様な箇所は、先述の通り『残唐』の筆の進みが駆け足になる後半、すなわち概ね王彦章の死以降(巻七、第四十三回以降)に集中し、中には殆ど『綱目』のダイジェストで終止する回すらある。『残唐』後半がこのように創作性に乏しい無味乾燥な内容に陥っていることについて、橋本氏は『残唐』が「個人英雄中心主義」の傾向にあり、中心人物である李存孝の死後「これに匹敵する中心人物が出現してこな」かったからだと分析する。また、大塚秀高氏は、『残唐』編者の構想は「後唐正統史観に立つて残唐の時期を語るべきものであって、後唐の滅亡以下の部分はいわば蛇足のようなものであった」と述べる。つまり、いずれの考え方にせよ、『残唐』編者は書くべきものを書いてしまった後は物語に対して急速に興味を失い、筆を早めて簡単に作品を完結させてしまったといえる。しかも、その部分は歴史書を利用することによっていわば「お茶を濁した」のである。

ところで、同じ時期をあつかった明代の通俗小説にもう一つ、『南宋志伝』(以下、『南宋』と略称する)がある。こちらは『残唐』と異なり、『五代史平話』との関係が深い。というよりも、その大部分は『五代史平話』を

『五代史平話』の成立(岡村)

利用して成り立っているのである。⁽²²⁾ この作品が五代史という設定を重視していたことは、その題名には見えなくとも、『五代史平話』を利用することからも明らかであろうし、また末尾に後周恭帝の死亡記事を置くことからいってもその傾向は顕著である。この『南宋』の構造を今少し詳しく検討してみたい。

『南宋』は、後唐末より北宋趙匡胤による江南平定までを描いた作品で、北宋建国までを『五代史平話』に、それ以降は『統資治通鑑長編』『通鑑綱目統編』あるいはそれに類する歴史書に依拠しつつ、間に趙匡胤にまつわる物語や戦いの詳細な描写等を交えつつ成り立っている。

『南宋』が『五代史平話』を利用したと思われる箇所は次のようである。⁽²³⁾

至唐天成二年、有功封六軍諸衛副使。一日、跟明宗出郊打圍、赶得一隻白狐、被軍卒捉獻敬塘。敬塘將殺之、白狐忽作人言曰、「你休害我。他日愿報恩德。」敬塘大驚、問其故、白狐又曰、「咱的女孩兒名述律、見在朔方、勇力絶人。你是大唐皇帝後、他日做我的外孫、善保富貴、休□相忘。」道罷、起一陣狂風、飛沙走石。須臾間天地復清。白狐不知去向。衆人皆言、「好作怪。」收回圍場。
(卷一)

至唐天成二年、累功爲六軍諸衛副使。一日、跟明宗出郊打圍、赶得一隻白狐、被軍卒拿與敬塘面前。白狐或作人言道、「恁休害我。他日厚報恁恩德。咱的女孩兒述律、見在朔方、有氣力。你是大唐皇帝的、他日做我的外孫、善保富貴、他時異日休得相忘。」道罷、起一陣惡風、揚沙走石。須臾間天地廓清、白狐或不知去向。
敬塘道、「這事也好作怪。」
(晋史平話 卷上)

両者を比較すればわかるように、『南宋』は『五代史平話』の文章を利用し、時にそのままの表現でその中に取り込んでいる。

『五代史平話』は趙匡胤による宋の建国で終了しており、宋による江南平定までを描こうとする『南宋』よりも対象とする期間が短いため、『南宋』が『五代史平話』に依るのはその途中までであるが、それが何回までであるかは、現存する『五代史平話』の最終巻「周史平話」巻下がその末尾を欠くので、明確にしがたい。ただし、その部分の内容は目録により有る程度推測可能である。すなわち、「周史平話」巻下本文は周世宗の死で終わってしまった

ているものの、目録にみえる「皇子宗訓即位」「命趙太祖統兵北伐」「苗訓知天文」「日下有一日黑光相蕩」「軍次陳橋驛」「軍士推戴趙太祖」「趙太祖受恭帝禪」「趙太祖改國號爲宋」の各節がこの後に続いたはずである。この題目に対応する内容を『南宋志伝』の中に探せば、巻九、二十四葉（第四十五回）に

：是れ太祖皇帝たり。周主を奉じて鄭王と爲し、符太后を周太后と爲し、之を西宮に遷す。天下に大赦し、國號を宋とし、改元して建隆元年と爲す。而して周運亡²⁴べり。

とあることから、おそらくこの前後までは、『五代史平話』に依ることが可能だったであろう。

この『南宋志伝』の『五代史平話』との関連性を細かく見当すると、第一～四十五？回のうち、『五代史平話』と全く共通性のない回として十三～二十三回、三十二～三十四回、四十三～四十四回が挙げられる。（各回ごとに完全に物語が独立しているわけではないので、回で分割して論を進めるには無理があるが、今は便宜上回に依っておく。）これらの回に共通する特徴として、その殆どが趙匡胤にまつわるはなし、例えば、南唐から送られた美女にうつつをぬかす後周の世宗をおもんばかって、その美女を殺してしまうなどといった物語で、歴史書、少なくとも『宋史』『統通鑑長編』『通鑑綱目統編』の類には見えないはなしであることに気付く。一方、『五代史平話』を利用する部分は、『五代史平話』が多く歴史書を引用するのだから、『南宋志伝』のかなりの部分は歴史書を利用していることになる。また、『五代史平話』を丸写しするという編集態度は、自力での創作の可能性を有しないという点において、歴史書を利用するのと何ら異なるところがない。

『南宋志伝』が宋による江南平定までを描くことを考えれば、趙匡胤が中心人物であることはゆるがない。とすれば、この作品もまた『残唐五代史演義伝』と同じく中心人物の描写に力点を置き、それ以外の部分は先行文献を利用して全体を構成する、という構造であることになろう。

四、『五代史』という主題

以上、『五代史平話』『残唐』『南宋』と三つの作品を並べてみたが、いずれも特定の人物の活躍を中心に据え

『五代史平話』の成立（岡村）

て描き、それ以外についてはせいぜい戦いの場面を派手に演出する程度で、作品全体の枠組み、すなわち歴史の流れそのものについては歴史書などを利用して埋めるといふ構造であると言えよう。『五代史平話』は後者の部分が大半であるとはいえ、構造的には他と変わりはない。では何故いづれも似たような構成なのであろうか。もちろん、たった三作品を並べただけで論断することは不可能であり、この他にも例えば戯曲などの方面からのアプローチも必要ではあろう。また、明代の小説はそれまでの「平話」のような通俗小説の荒唐無稽さから脱却して、多く『通鑑』や歴代の史書に依って書き改める傾向にあったことも考慮しなければなるまい。しかし、ここでは「五代史」というテーマの持つ特徴に照らして、敢えて推論を試みたい。

さて、今一度宋代の「五代史」語りとはいかなるものであったのかを考えてみたい。先に挙げた『東京夢華録』『京瓦伎藝』には、実は「尹常賣」「五代史」とは別に、「孫寛、孫十五、曾無黨、高恕、李孝詳、講史。」と別項目として「講史書」を取り上げた記事があり、必ずしも「五代史」イコール「講史書」であるとは言い切れない。従って、それは或いは歴史書から離れた内容であった可能性もあるのである。同じく当時流行していたらしい「説三分」の流れを受けるであろう『三国志平話』は、歴史書をそのまま利用することはせず、荒唐無稽な部分をも多く含んでおり、「説三分」が史実に極度に縛られることなく、自由に物語を發展させていたことがうかがえる。五代史語りは、三国故事に比べれば当然歴史が浅い（三国故事語りが少なくとも唐代には存在したであろうことは、李商隱「驕兒詩」からもうかがえる。）とはいえ、「五代史」が「説三分」と同様に一独立項目として挙げられるところをみれば、やはり語り物として十分発達していたに違いない。

『東京夢華録』には、宋代に「五代史」語りが流行していたという記事があり、同じく宋代の成立ではないかとされる『五代史平話』があり、そしてその『五代史平話』は大部分歴史書を利用して成り立っているとなれば、自然、それが宋代の「講史書」の名残ではなかったかと考えるであろう。しかし、先に述べたように「五代史」は必ずしも「講史書」であるとは限らず、一方『五代史平話』の歴史書を利用した部分には当時語り物に必須だったであろう詩詞の挿入がほとんど見られない。つまり、『五代史平話』が「講史書」の面影を残すものであるという見方には疑問が残るのである。もちろん詩詞の挿入のみで事を断じることは危険であるが、少なくとも詩詞の挿入が

見られる方が、より語り物の形態を意識していると考えられるのであって、その点『五代史平話』にはそういう意識が欠落しているのである。むしろ、『残唐』や『南宋』の例と同じく、『五代史平話』の歴史書を利用する部分は五代史という体裁を整えるために埋め合わせとしてはめ込まれたものではなかったらうか。

そもそも「五代史」という枠組みが問題なのではないかと思われる。歴史語りで喜ばれるのは、歴史上の様々な事件を舞台に活躍する人間（英雄と言いつてもよい）達の物語であろう。従ってそのような彼らの物語は様々に語られ、発達していくことになる。これは、李存孝や黄巢、劉知遠、石敬瑭などの英雄達の物語が種々の作品の中に描かれる所以でもある。では、彼らの活躍の物語を教珠繋ぎにして五代史全体を描くことができるかという点、それは困難であるにちがいない。彼らは五代のいずれか一代の中心人物とはなり得るが、五代史全体の中心人物とはなり得ないからである。再び三国故事を引き合いに出せば、こちらは劉、関、張、それに諸葛の活躍という主軸があり、これに曹操、呂布、周瑜といった対抗馬がからんで三国時代全体を語ることが可能である。事実『三国志平話』はそのような構成になっている。しかし、五代という時代は五つの国が次々に興廃するのであって、五国同時存在ではない。従って三国故事のように一定の史観に基づく善玉、悪玉という区別も明確になりにくく、それぞれの英雄がそれぞれの時代において主役なのである。

一方、いずれかの英雄の物語をつなぎ合わせて五代の中の一時代のみを描くことは可能だろうが、主役たるに足る英雄が歴史の舞台から去れば、そこで物語は終結してしまふ。『三国志平話』が諸葛亮の死でほぼその幕を閉じ、後に劉淵が蜀漢を再興したという記事を付け加えるのみであるのもこれに類すると言えよう。となれば、各時代の物語を「五代史」という統一の枠組みの中でつなげようとしても、それぞれの時代のつなぎ目にあたる部分が、どうしても不足してしまふ。つまり、『五代史平話』のように「五代史」という枠組みに拘って、各時代の勃興と衰滅を描く形式で一つの作品を編む限り、どうしても各時代をつなぐ何らかの接着剤が必要になってくるのである。そして、そのような接着剤が必要となったとき、歴史書以上に利便なものがあるだろうか。

こうしてみると、五代史をめぐる作品の構造の類似は、むしろ当然のことであると思えてくる。すなわち「五代史」をめぐる各作品の編者は、「五代史」という体裁、「五つの国が次々に興っては滅び、やがて宋によって統一

される」という枠組みに拘り続けた。そしてその結果、编者達は、それぞれ最も安易な編集方法を採用し、歴史書を利用することで形を整えたに過ぎなかったのではないか。

現存する『五代史平話』は「新編」と銘打っているので、当然より早く刊行された『五代史平話』があったと考えられる。しかし、現存する『五代史平話』に先立つ平話が果たしてどのような内容のものだったのかは、それが果たして「五代史」という言葉を冠していたかも知れないか不明である。あるいは「五代史」という枠組みには拘らないものだったかもしれない。その原『五代史平話』について大塚氏は次のように推測しておられる。すなわち、中国北方の異民族の影響が強い地域で作られた『五代史平話』を、南方の才人達が漢族中心史観によって編纂し直したのが『新編五代史平話』ではないかというのであるが、これは大変示唆的である。そもそも五代には、契丹の助けを借りて成立した国が多かったのだから、そこでは異民族を蔑視し排斥しようという考えは弱まらざるを得なかったであろう。自然その時代に活躍した英雄達の物語にも、極端な異民族への悪感情は述べられず、むしろ融和の方向にあったことすら考えられる。そして最初に成立した『五代史平話』とは、おそらくそのような物語に支えられていたに違いない。とすれば、これが異民族の圧迫に疲れた南宋の人々には受け入れがたい性質のものであったことは十分にありえることであろうから、それをもとに「新編」が編集されたときには大幅な改変が行われたと考えられよう。そして現存の『五代史平話』が成立するわけであるが、この作品は「五代史」という形態に拘り、その結果、今のような歴史書に寄り掛かった形態に改変されたのではなかっただろうか。

つまり、現存する『五代史平話』の歴史書を利用する部分とは、或いはもとの『五代史平話』を改変しようとしたときに、後から書き加えられた部分に過ぎないのではないか。そして、そこには語り物としての役割はおそらく想定されていなかったのではないかと思われる。

五、結

宋代に流行したという「五代史」語りとは、五代に活躍した英雄達の物語をその内容としたと考えられる。そし

てその物語をもとに、「五代史」という枠組みに拘って歴史小説を編集しようとした時、その際編者はどうしても各時代をつなぐ接着剤のようなものを必要としたはずである。そこに利用されたのが歴史書の文章そのものだったのであろう。『五代史平話』の歴史書を利用した部分もこの様な過程を辿って成立したのではなからうか。もちろん、それにしてもこの様な部分の作品全体に占める割合が高すぎるのではないかという疑問も残る。しかし、いずれにしても、この作品を宋代の「五代史」語りの面影を残すもの、或いは「講史書」の名残を留めるものと考ええるには、今少し検討が必要なのではないかという疑問を提起することはできるであらう。

注

- (1) 毘陵董氏誦芬室新刊『景宋残本五代平話』跋。
- (2) 大塚秀高氏『増補中国通俗小説書目』（汲古書院、一九八七年）、阿部隆一『増訂中国訪書志』（一九八三年 汲古書院）第三篇「中華民国国立中央図書館等蔵宋金元版解題」等参照。
- (3) 丁錫銀氏『『五代史平話』成書考述』（復旦學報 一九九一—五）、氏岡真士氏「平話の基ついた史書——平話の作り手についての試論——」（日本中国学会報 49 一九九七年）等参照。
- (4) 『五代史平話』については、毘陵董氏誦芬室新刊『景宋残本五代平話』を底本とし、『宋元平話集』（丁錫銀点校、上海古籍出版社、一九九〇年）を参照して、原則として旧字にて表記する。なお、数字は葉数を指し、a・bは葉の右・左を指す。
- (5) 本稿では、康熙四十年重鐫『資治通鑑綱目』（明 陳仁錫評）を使用した。
- (6) 『五代史平話』の斯様な構造については、中鉢雅量氏「中国講史小説の二類型」（仏教大学文学部論集 79 一九九五年）に指摘がある。
- (7) 原文：崇、觀以來、在京瓦肆伎藝、…（中略）…、霍四究「說三分」、尹常賣「五代史」。〔卷五〕
- (8) 卷六「元宵」。

『五代史平話』の成立（岡村）

- (9) 日本内閣文庫所蔵「全相平話」五種の一『至治新刊全相平話三国志』。
- (10) 天理図書館所蔵『至元新刊全相三分事略』。
- (11) 『東京夢華録—宋代の都市と生活—』（一九八三年 岩波書店）「卷五 盛り場の演芸」注。
- (12) 原文：講史書、講説前代書史文傳、興廢爭戰之事。
- (13) 原文：講史書者、謂講説『通鑑』、漢、唐歷代書史文傳、興廢爭戰之事、有戴書生、周進士、張小娘子、宋小娘子、邱機山、徐宣教。又有王六大夫、原係御前供話、爲幕士。請給講、諸史俱通、於咸淳年間、敷演『復華篇』及中興名將傳、聽者紛紛、蓋講得字真不俗、記問淵源甚廣耳。
- (14) 「講史書」については、張政烺「講史與詠史詩」（國立中央研究院歷史語言研究所集刊10 一九四八年）参照。
- (15) 原文：但最畏小説人、蓋小説者、能講一朝一代故事、頃刻間捏合。
- (16) 原文：引詩爲證、…（中略）…只是「借古語以爲重」的精神、則雖說漢之與宋、學士之與市人、時候學問、皆極相違、而實有一致的處所。（『墳』「宋民間之所謂小説及其後來」）
- (17) 原文：吳自牧記講史高手、爲「講得字真不俗、記問淵源甚廣」、即可移來解釋小説之所以多用詩詞的緣故的。
- (18) 橋本堯氏「殘唐五代史演義論—英雄中心主義—」（中国文学報20 一九六五年）、氏岡真士氏「『殘唐五代史演義』への道—小説と講史—」（中国文学報52 一九九六年）等参照。
- (19) 本文中に引用した『殘唐』は、『古本小説集成』所収復旦大学図書館所蔵明末刊八卷本影印本による。
- (20) 上田望氏「中国講史小説研究」（東京大学大学院文学研究科博士論文 一九九四年）
- (21) 大塚氏「小説と物語（統）—物語の構造と変貌—」（中国古典小説研究動態5 一九九一年）。
- (22) 『五代史平話』と『南宋志伝』の關係については、戴不凡氏「『五代史平話』的部分闕文」（『小説見聞録』 一九八〇年 浙江人民出版社）に詳細な論考がある。
- (23) 本文中の『南宋』は、古本小説集成所収の『南宋志伝』により、同じく『南北宋志伝』を適宜参照した。
- (24) 原文：…是爲太祖皇帝。奉周主爲鄭王、符太后爲周太后、遷之西宮。大赦天下、國號宋、改元爲建隆元年。而周運亡矣。

(附記) 最近、氏岡眞士氏が『五代史平話』のゆくえ——講史の運命——(中国文学報 56 一九九八年) という論文を発表され、その中で、『五代史平話』の構造について、詳細な論考を展開された。論者は迂闊にも拙論の脱稿後にこの論文の存在に気付いたため、先行する氏岡論文の趣旨を拙論中に組み入れることができなかった。いま、氏岡論文の『五代史平話』について論及した部分についてまとめると、以下の様になる。

氏岡論文は、

① 『五代史平話』はその四分の三を歴史書により、その他(話芸としての)「小説」の系統に属する「発跡変泰」や戦闘場面を増補することによって、娯楽性を高めている。

② 時代が下るにつれて「小説」と「講史」の境界があいまいになっていき、①に挙げたような『五代史平話』の形態は、「擬話本」たる平話がそういった状況を反映した結果ではないか。

とし、その上で、教養性の高い「講史」が、娯楽性に富む「小説」に圧倒されていく過程を『残唐五代史演義伝』『南宋志伝』『飛龍全伝』を引いて検証しておられる。以上、ここに附記する。